

## パレート社会システム論再考 (Ⅱ)

— 歴史における社会システムの均衡 —

赤坂 真人

### Pareto's Social System Theory Reconsidered (Ⅱ)

— The equilibrium of Social System in History —

Makoto AKASAKA

#### Abstract

A purpose of this article is to draw exactly a summary of the social system theory of Vilfredo Pareto to be the Italian sociologist who first introduced a method called a system analysis to sociology. It is Lawrence Joseph Henderson that introduced the social system theory of Pareto to the American sociology. He read Pareto's *Mind and Society* and was fascinated by this book, and propagates Pareto's sociological theory mainly to the teachers and graduate students of Harvard University. In these teachers and graduate students, especially Talcott Parsons and George Casper Homans was influenced by Pareto's sociological theory and made a unique social system theory develop.

However, almost all books and papers to trace the tradition of a social system theory have not considered the idea of "social system" of Pareto in detail that is one of source of the system analysis in sociology. In this article, I will return to a starting point of Pareto's system theory and give it detail consideration over again. It may present clearly a significance of Pareto's theory in the history of the social system theory.

**Key words** : Pareto, social system, equilibrium analysis, circulation of elite

キーワード : パレート、社会システム、均衡分析、エリートの周流

Ⅱ パレートにおける社会システムの概念  
(前号からの続き)

Ⅲ 歴史における社会的均衡  
結語

#### 政治体制

ある社会のなかで観察される錯綜した諸現象のなかでも「政治体制」という現象は非常に重要である。なぜならそれは支配階級の性質と緊密に結びついているからだ。<sup>46</sup>しかし「政治体制の最良の形式はいかなるものであるか」という問いは、「最良」という言葉の意味が厳密に

定義されない限り意味がない。ゆえに政治体制の考察は、結局、さまざまな派生体を産出しただけであった。しかしたとえ派生体であっても、それらが君主政・共和政・寡頭政・民主政に関して表出した感情は、人々をある方向に駆り立て、社会の種類と形式を決定する重要な要因となった。

今日では「民主政」があらゆる文明国民の政治体制になる傾向がある。しかし「民主政」という言葉の厳密な意味は「最良」という言葉と同様きわめて不明確である。そこでパレートは「民主政」の基本原理を明らかにするため、ス

イス・フランス・イタリア・イギリス・アメリカ・ドイツ・ロシア・日本・トルコや中央アメリカの共和国を比較する。そこには「議会の立法権の強弱」に関する大きな格差が見出されるが(すなわち議会制民主主義の成熟度・国民主権の強弱)、議会の議員は国民の権力を委任された代表であり、統治階級に属する小数の政治的エリートであるという共通項が見出せる。民主政における議員が権力を維持する方法は、ひとつは「力」であり、もうひとつは被支配階級の「同意」である。後者はウェーバーの「合法的支配」に対応するものと考えられるが、パレートによれば、力の行使を伴わず国民の完全な同意によって運営された政府は歴史上例を見ない。これに対し専制君主制は、主に支配階級の有する力(警察や軍隊)によって権力を維持する政治体制であり、現代においても多数存在する。<sup>47</sup>

政府の仕事は既存の残基の利用方を知っていれば、より効果的である。しかし支配のための手段として、残基のほかに利害を付け加える必要がある。往々にして利害は残基を変化させるための唯一の道を拓く(傍点、筆者)。とりわけ利害は結合本能の残基が支配的な人々、すなわち支配階級の人々に働きかける有力な手段となる。しかし集合体維持の残基が支配的な人々、すなわち被支配階級の人々に対しては利害に加えて、集合体維持に関するなんらかの感情が付け加えられないと効果がない。<sup>48</sup>

支配階級内部において政治的・経済的エリートの頂点にのぼりつめるためには、被支配階級の残基と利害を利用せねばならない。<sup>49</sup>彼らは当然、支配階級たちの利害を保護するが、そのほかにも重要な手段がある。それは今日の民主政では有権者、官公吏、ジャーナリスト、その他の政治的買収であり、絶対主義君主政のもとでは宮廷人、寵臣、寵妾、官公吏、将軍などの買収である。パレートによれば「このような手段は古代ギリシアおよび共和制ローマの時代から今日にいたるまであらゆる時代に使われた」

ものであり、「それゆえ、それらの使用を抑制するために行われた無数の試みは、これまでも無駄であったし、現在も無駄なままである」。<sup>50</sup>

支配階級と投機家の関係は当然隠されるが、<sup>51</sup>時として暴露されることがある。もし支配階級がAであるとする、暴露するのは敵対勢力Bである。しかしながらパレートによればBがAの不正を暴露するのは既存の社会秩序を変更するためではなく、「Aがもっているものを奪いAに代わることによって社会秩序を自分たちの利益になるように向かわせる」ためである。「その結果、野党は、相手を政権から追放するために事件を利用しはするが、自らが権力について時は相手とまったく同じことをしようとする」。<sup>52</sup>実際、「イタリアでは右派が支配していたときには、各種の左派はその敵の汚職にたいしてわめきたてていた。次にそれらが相次いで権力を握るようになると、右派と同じくらい、あるいはそれ以上の汚職さえやらかした」。<sup>53</sup>これらの言明は前稿の冒頭部分で述べた、パレートの進歩的、理性的、民主的勢力の俗物性に対する失望と怒りを示している。どんなに立派な理想(派生体)を語ろうとも、人間の本質(残基)は変わらないという、ある種のベシミズムは『一般社会学大綱』を貫く通奏低音である。<sup>54</sup>

しかし支配階級に属する人々がすべて投機家タイプの間人であるわけではない。パレートによれば、この中には三つのタイプの人々が存在する。(A)断固として理念的な目的をめざし、一定の行動規準を厳格に守る人々。(B-a)権力と名誉を得れば満足し、物質的な利益は取り巻き連中にまかせておくような人々。

(B-β)自分自身および取り巻き連中双方のために物質的利益、一般に金を求める人々。これまでの論述から推測されるとおり、(A)の人々は第二種の残基が強く、(B)の人々は第一種の残基が旺盛である。それゆえこれらの人々は支配することにより大きな適性を有する。<sup>55</sup>

## 政党の類型

パレートによれば政党は大きく二つに分けることが出来る。すなわち (I) 政権への道を歩むいくつかの政党。(II) 非妥協的ないくつかの政党 (これらの政党は政権を獲得できない)。(I) の政党の内部には最小限の (A) と最大限の (B) が存在し、(II) の政党の内部においてはその逆になる。<sup>56</sup>なぜそうなるかと言えば、人が代議士になれるのは、あらゆる手段を使って政府の恩恵を彼の支持者に与えるか、約束するからである。Aタイプの人々が代議士になれるのは、彼らが代議士身分を買い取るだけの富を有するがゆえである。彼らにとって代議士身分は単なる贅沢にすぎない。代議士が大臣になるためには、候補者たちは「代議士およびその政治的取り巻きの利益のために働くことに専念しなければならない」。<sup>57</sup>

一般庶民はこのような各種の利権・利益を引き出すには、ただ不正な行為をすればよいと考えているが、それはまったくの誤りである。「あらゆる種類の計略において、類稀な上質の明敏さと手腕とが必要とされる」のであり、そのような能力のない政治家はいずれ不正を暴かれ失脚する。しかし「国民の下層階級のなかには第二種の残基がまだ大量に存在している。したがって、現実には単純な物質的利害によって動かされている政府も、少なくとも理念的目的をめざしているかのごとき装いをしなければならない」。

パレートはこのような「不誠実な」候補者が選出されるのは、偶然ではなく「制度による選択であり、帰結である」と主張する。<sup>58</sup>代議士になるには詭計をめぐらす卓越した能力が必要である。しかし時たま、彼らの不正が暴露されることがある。そのような場合、野党はそれをネタに与党へ攻撃をしかける。これに対し与党は、最初は当事者を擁護する。だがそれが不可能とみるや、彼らをあっさりと切り捨てる。<sup>59</sup>

## 政府の類型

パレートによれば政府は大まかに次の二つに分類される。(I) 主に物質的な力および宗教感情その他の感情の力を行使する政府。(II) 主として詭計と策略を行使する政府で、主に感情に働きかける政府 (II-a)。主として詭計と策略を行使する政府で、主に利害に働きかける政府 (II-b)。いうまでなく (I) のタイプの政府には第二種の残基を多くもつ人々が多数を占め、(II) のタイプには第一種の残基を持つメンバーが多い。しかし実際には (I) も (II) もどちらか一方のタイプで占められるということはきわめて稀で、両者の混合形態であることが多い。パレートによれば、今までの言説から予想される通り、タイプ (II) を基調としつつ、タイプ (I) をも相当量含んでいる政府は長期にわたり存続し、経済も発展する。<sup>60</sup>現代日本にこの言説を当てはめてみると、まがりなりにも自民党が長期にわたり政権政党として権力を掌握し続けたのは、詭計・策略を弄する政治家と力を行使する政治家とのバランスがとれていたということになる。しかし国内の経済発展や治安維持は評価できるとして、外交における我が国政府の無為無策ぶりはどう説明すればよいのか。

## 経済的循環

パレートは政治体制を論じた後で、経済変動について考察する。彼によれば時代を画するような激しい社会変動は、利害 (b) ・循環 (d) 関係によって生じる。残基 (a) は長い時間をかけてゆっくりと変化するものであり、数年、数十年といった短期の変動には影響をあたえない。逆に派生体 (c) は人々の行為の非論理性を合理化し、隠蔽するものであるから、変動の方向は示すが、その源泉とはなりえない。

経済変動の分析に際しパレートは、経済動向を示す「指数」を重視する。たとえば農業国においては農産物の収量を指数とすることができる。記録されていないかまたは失われてしまっ

た過去の収量は、各時代の「小麦の価格」で推測または代替することができる。近代に至り諸国での貿易が盛んになると「国際貿易の変動と手形交換所における手形交換の総額」が重要な指数になった。パレートによれば、これまで一国の経済的推移についての状況を把握すべく、経済的諸指数のさまざまな組み合わせが探求されてきたが、未だ成功していない。ゆえに短期的な経済変動はともかく、長期的変動は全く説明されていない。その根本的原因は長期的変動（循環）を解明するデータを入手していないことにある。<sup>61</sup>

パレートの『一般社会学大綱』では、数理経済学に関する踏み込んだ議論は全くなされていない。ただ様々な時代のランダムに選ばれた経済現象に関して、利害（経済的繁栄）とエリートの周流の相互作用に関する論述が展開されるのみである。その骨子は経済的繁栄の時代には第一種の残基を多く保有する「投機家」が活躍し、支配階級への参入を果たす。そして今度はそれらの野心的な「投機家」がさらなる経済的繁栄をもたらすという相乗効果の強調である。

たしかにこのような経済的繁栄は、歴史上、あらゆる地域で生じたにちがいない。しかしながら、なんとなく違和感を抱くのは、パレートの例証が主に西欧の事例に準拠しているためであろう。たとえば我が国でも江戸時代、経済的成功を取めた商人（豪商）が支配階級である大名や旗本に金を貸すまでになったが、士農工商という儒教的身分秩序のもとでは、政治的エリートにはなりえなかった。中国では秦・漢の時代から最後の清王朝まで売官が盛んに行なわれた。しかし我が国では平安時代から鎌倉時代にかけて庸・調の粗悪化、未納の増大により困窮した皇族・貴族が売官を行ったが、それ以降は途絶え、「投機家」が政治的エリートになる機会は存在しなかった。

もちろん経済的エリートの周流に限定すれば、事情は異なる。中国では中華人民共和国の成立から1978年の改革開放政策までかつての資

本家や地主は迫害され、経済活動を行うことができなかった。しかし改革開放政策によって市場経済を導入した中国は、その後の26年間でGDPを30倍に増大させ、数多くの富豪を生んだ。また日本でもバブル経済崩壊後の十数年に及ぶ経済的停滞においてさえ、銀行や証券、投資会社の破綻を尻目にIT長者のような「投機家」が成功し、経済的エリートに参入した。

### エリートの周流

パレートはフランス革命以前と以後の社会状況を比較して、その相違を「経済的利害」の優越と「エリートの周流」の激しさに求めている。彼はフランス革命以降、国際政治の課題は経済的利害をめぐる闘争であり、国内政治もまた経済的葛藤の処理に還元されると述べる。「投機家」の活躍と「エリートの周流」という命題の繰り返しに読者は辟易するが、パレートがこれら狡猾な「投機家」たちを好意的に見ていない点は記憶にとどめておく必要がある。彼によれば真に望ましい政治的指導者とは、権力と名誉で満足する者であり、その一部を自分の懐に入れるような輩ではない（傍点、筆者）。<sup>62</sup>

民主主義や人道主義を鼓舞する人々を嘲弄するパレートにはふさわしくない言明であるが、彼らのイデオロギー的言明を徹底して攻撃したのは、人間行動を規定する残基を直視し、そのうえでどうすれば上記の理想を実現できるかを真剣に模索したからだと解釈するのは深読みであろうか。彼は「投機家」に対する「金利生活者」の慎重さ、臆病さをこきおろし、「投機家」の餌食となる彼らの運命を淡々と記述する。<sup>63</sup>『一般社会学大綱』はリベラルな論陣をはって国会議員に立候補し、落選という辛酸をなめた後に執筆された書物である。晩年におけるパレートには「狐」と「投機家」による「利子生活者」からの略奪を告発し、これと闘おうとする姿勢はみえない。しかしイタリア鉄鋼会社の支配人、すなわち「投機家」であった若き

日のパレートの出自は「金利生活者」たる「貴族」であり、晩年は「投機家」としての生活を捨て「金利生活者」として執筆に没頭した。もし彼が「金利生活者」を嘲弄するなら、それは自らを嘲弄することになる。彼は言う。歴史時代以降「私有財産権が無制限に、そしてまったく厳密に維持されているような社会の例は存在しない」。<sup>64</sup>彼の透徹したリアリズムはさておき、だからこそ「金利生活者」に対する警告が必要なのだ。筆者はパレートの「金利生活者」に対する嘲弄や苦言を、彼らに対する警告と読む。というのも彼は以下で述べるように、決して「ライオン」と「力」に好意をよせてはいないからだ。

### 派生体の振動

パレートは派生体がシステムの他の構成要素に及ぼす影響力を重視しない。繰り返し述べてきたように、派生体とは個人の利害や価値観を正当化するイデオロギーにすぎない。パレートによれば現代社会を覆い尽くしているかに見える「合理主義と人道主義」という行動規範は、少なくとも古代ローマ、ハドリアヌスおよびマルクス・アウレリウスの時代以降、何度も登場した。しかし同時に一方でナショナリズム、そして帝国主義やサンディカリズムが、他方でオカルティズムや心霊学、形而上学的雰囲気復活し、合理主義や人道主義の思想をかき消してしまった。<sup>65</sup>パレートはこのような循環もまた人間の残基に由来するものと捉えている。派生体はそれぞれの時代的制約のもとで姿形を変えて語られる言説に過ぎない。

とすればマックス・ウェーバーのペシミスティックな「合理化論」やフランス革命の「人権宣言」そしてマルクスの「共産主義社会」さえも、パレートの目から見れば「知識人たちの夢」にすぎないのだろうか。パレートによれば幾人かの知識人や善意の人道主義者は、これらの派生体に共鳴し、それらの理念が支配する世界を夢見る。<sup>66</sup>だが投機家たちは、表面上は

それらに賛意を示しながら、その陰で自らの利益のために着々と作戦を実行する。19世紀初頭の支配者たちは、プロレタリアの思想を抑圧し迫害した。だが19世紀後半のエリートたちはプロレタリアを擁護した。<sup>67</sup>パレートは支配階級によるプロレタリア擁護の言説を信用しなかった。それらの言説の陰に隠された「狐」の正体を見抜いていたからに違いない。しかし、もしパレートが20世紀前半に達成された中国の共産主義革命を目撃したとすれば、その指導者たちに多くの支配階級の出身者たちが含まれていたという事実をどう説明しただろう。そして彼らが自らの出身階層を人道主義ではなく、銃口で崩壊させたという事実をどのように解釈しただろう。これこそ人間行為の非論理性を実証する証拠として呈示したのだろうか。もっとも中ソの共産主義体制は、わずか60～70年で実質的に崩壊してしまったのだが。

### 残基の生成

しかしながら、パレートは派生体が人間行為に与える影響を否定しているわけではない。パレートは派生体に関する「真理性」と「社会的有効性」という二項対立を立て、それが科学的見地からすればいかにばかげたものであっても、社会的統合や目標の達成にきわめて有効な影響を及ぼすことを理解していた。ゆえにこそパレートは「われわれは、派生体を研究したときに、実験的観点からみれば明らかに無根拠で無意味な、そして馬鹿々々しい派生体は何世紀ものあいだ存続し、また再生産されるのは如何にして、またいかなる理由によってか、ということを検討しなければならなかった」のである。<sup>68</sup>

なぜ派生体は何世紀も生き残り、あちこちで姿を変え復活するのかという問いはきわめて重要な問題である。われわれ人間はばかげた妄想に振り回され、数えきれないほどの悲喜劇を演じてきた。昨今の驚異的な科学の発展にもかかわらず、いっこうに派生体が消滅しないのは、

われわれがその存在を必要とするからであろう。人間は決して合理的な思考によってのみ行為を選択、実行する理性的存在ではない。むしろしばしば非合理的な感情に駆動され、誤った選択を行う非理性的な存在である。パレートの用語で言えば、人間精神のうちに実在する「残基」に駆動された非論理的行為を正当化するために、人は派生体を必要とするのだ。

それではいかなるメカニズムで人間の心に残基という行動体勢が形成されるのか。この問題についてパレートは、第二種の残基に属する「循環」の生成に関して、興味深い説明を展開している。彼によれば「この残基は、昼と夜、季節、の定期的交替の観察、そして天体観察が開始されるようになるもっと後の時代では、月の位相、天体の運動の観察、から生まれた」。他の領域でも豊饒と不毛、繁栄と衰退、誕生と死など社会・自然現象における様々な事象が「波動、周期、循環」といった世界観を育てる。<sup>69</sup>つまり人々は多種多様な社会・自然現象のなかに斉一性を見出し、それが残基に成長するというわけだ。

この説明はフロイトによる「自我の生成」に関する説明に似ている。フロイトによれば自我は、個人の精神が外界と絶えず接触することによって形成される。この場合、自我は当然、接触する個別的他者の価値観や社会エートスを反映する。しかし拙稿「パレートの行為理論再考(Ⅱ)」でも述べたが、パレートの議論には残基自体の社会的存在拘束性に関する議論が抜け落ちている。彼はギリシャ、ローマ時代以降のさまざまな歴史的事象から残基を帰納し、かつ残基の論証と傍証を行っている。だがこの方法を採用する限り、当然、彼の呈示する残基には西欧の社会-文化的拘束性が反映されるはずである。もしパレートの存命中にカール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』が執筆されていたら、間違いなく彼は残基の社会的存在拘束性を認め、それを相対化する作業を行っただろう。<sup>70</sup>

## システムの恒常的な要素と変化しやすい要素

パレートは第12章の最終部分で、「残基」による社会的事象の説明を擁護するために、再び科学哲学の議論を展開する。彼はまずニュートン力学の単純さと、その説明能力の高さを賞賛し、そのあとで経済学や社会学の困難さに言及する。パレートは経済学において変数を欲望とその充足に対する障壁に限定することによって、経済学的均衡を定式化した。だが社会学においては多くの変数が複雑に錯綜し、経済学のような定式化ができない。しかし科学としての社会学を目指すなら、社会学もまたこの手続きに従わなければならない。すなわち複雑な具体的現象をきわめて単純な理論的現象に還元しなければならない。

そこで彼は次のようなロジックを展開する。すなわち「現象の単なる記述からは、直接ほとんどなにも引き出すことはできない。この意味では、『歴史は二度とは繰返さない』という格言はまったく真実である」。だが「最も重要といいうるいくつかの部分において歴史が『つねに繰返す』ということもまったくたしななことである」。<sup>71</sup>歴史的、社会的事象は細部にこだわる限り、法則命題を定立することはできない（歴史的事象の一回起性）。だが抽象レベルを上げれば、それらの事象に同じ構造や斉一性を把握することが可能となる。残基は緩慢にしか変化しない。ゆえに残基を現象の不変的部分を決定する要因の一つとすることができる。<sup>72</sup>

この点に関しT.パーソンズは『社会的行為の構造』のなかで、パレートが科学における分析的概念の抽象性を明確に認識しており、「より一般的な方法論の文脈では、パレートの方がウェーバーよりもずっと明晰な考えをもっていた」と高く評価している。<sup>73</sup>

だが、ここで私が注目したいのは科学的方法論ではなく、パレートが相対的に「変化しにくいもの(残基・利害)」と「変化しやすいもの(派生体・エリート)の周流)」という二分法を用いて、社会システムの分析を行ったことであ

る。なぜならパーソンズが自ら言明しているように、彼もまたパレートが理想とした、社会システムの偏微分方程式による記述を諦め、代替策として相対的に「変化しにくいもの（構造）」と「変化しやすいもの（機能）」という構造-機能分析の手法を採用したからである。この点においてパーソンズは明らかにパレートの社会システム論を継承している。<sup>74</sup>

### Ⅲ 歴史における社会的均衡

パレートは最終章においても、自らのテーゼを論証すべく、さまざまな歴史的事象に自らの命題を当てはめ、妥当性を吟味する。その命題とは「社会的均衡を決定する主要な要因の一つは、諸個人のもとに存在する第一種の残基と第二種の残基との比率である」という命題である。<sup>75</sup>ここでもパレートは用心深く、①残基の比率を原因、社会現象を結果とする誤謬、②両者の相互依存関係において残基の一定比率を必要条件ではなく、必要十分条件とみなしてしまう誤謬に留意を促す。そしてアテネとスパルタ・テーベ・マケドニア、第二帝政期以降のドイツとフランス、ローマとギリシャ・カルタゴ、ナポレオン三世とビスマルク、プロイセンとナポレオン一世等における残基の比率とその歴史的帰結について分析する。

ここで留意すべきことは、エリートの周流を社会システムの変動と混同してはならないということである。われわれは暴力革命による政治的エリートの周流や投機家による経済的エリートの周流に目を奪われ、無意識のうちに社会システムの構造変動をイメージしてしまう。しかしパレートは暴力革命による権力者の交代にせよ、あるいは投機家の経済的成功による上層階級への参入にせよ、それらは動態的均衡状態を維持している社会システムの地位-役割を担う個人が入れ替わるだけで、社会システムの構造変動とは考えていない。

佐藤茂幸によれば、パレートは『社会主義体制』序論の中で、エリートの循環は社会生理学

の原理の一つであるとして次のように述べている。「後者〔生命組織〕における血液の循環は、いくつかの分子を急速に移動させ、消化と分泌の過程は組織を絶えず変化させている。だが、この組織の外形、たとえば動物の成体には、これといった変化は示されない」。佐藤はこの一節を示しながら「エリートの循環は、このように有機体の新陳代謝とのアナロジーによって説明されて」おり（傍点、筆者）、このことはこの時期、パレートが富の分配やエリートの循環を解明する科学を「社会生理学」と呼んでいたことから傍証されると主張する。<sup>76</sup>もしそうであるとするなら、われわれはこの点においてもパレートの社会システム論とパーソンズのそれとの親和性を認めることができるだろう。

### 支配階級のタイプと国民の幸福

エリートの周流の分析において彼がヴェネチアに言及するさい、彼は興味深い問いを立てている。それは「国家の独立の喪失とひきかえに、多くの世紀、きわめて多くの世代にわたる〔個人〕の幸福を得ることは良いことなのか悪いことなのかという問題である」（傍点、筆者）。<sup>77</sup>パレートによれば、新大陸が発見され、ヨーロッパ各国が競ってアジア、南北アメリカ、アフリカから富の収奪を行った第3期大航海時代（1530年-95年）、地中海の制海権を握っていたオスマン帝国の海軍を、ローマ教皇庁・スペインと連合レバントの海戦で壊滅させたヴェネチアは、当時、間違いなく世界第一の海洋勢力であった。ところがヴェネチアはスペインやポルトガルが行ったようなアメリカや東インド諸島の領有に乗り出さず、勝利の果実をイギリス・オランダ・フランスに奪われてしまった。パレートによれば、その原因はもっぱらヴェネチア貴族の臆病さと気概の欠如にある。ヴェネチアは慣例的に、自国の軍隊の指揮を外国人に委ねるというやり方をとってきた。それはひとつ間違えば自分で自分の首を絞める

ことになりかねないが、これによってヴェネチアの貴族階級は戦いに勝利した将軍によって地位を脅かされるという危険を免れることができた。貴族階級における第二種の残基の欠如は、最終的にヴェネチア共和国の没落の原因となったのであるが、この制度のもとでヴェネチア人たちは幾世紀にもわたって幸福な生活を享受した。「この幸福は、第二種の残基が多量に存在したために狂信が人々を圧迫していた国々の、不幸な住民を責めさいなんだ苦悶、破滅、殺戮と好対照をなしていた」(傍点、筆者)。<sup>78</sup>

ここで上記の問いが立てられる。たとえ大国に併呑されても人民が幸福を享受できればそれで良いのか。独裁者のもとで貧困にあえぎ、人権を抑圧されても独立を維持すべきなのか。残念ながらパレートは「この問いにどう答えたらよいのか誰にもわからない」という。答えられないひとつの重要な原因は、この設問に対する答えが「価値判断」を含むからだ。

以下の記述は筆者の価値観の表明にすぎないが、政治的支配者には堅固な理想を掲げ、それに邁進する「ライオン」タイプの人物よりも、傍目には姑息に見える「狐」または「投機家」タイプのほうが、国民にとっては害が少ないと言えそうだ。堅固な理想を抱く人物は妥協を許さない。そして意見の対立が生じたとき、彼らは説得や買収ではなく、容易に暴力という手段に訴える。彼らにとっては全体の利益や犠牲よりも目的の達成のほうがはるかに重要である。

アリア人種至上主義を唱え、600万人のユダヤ人を虐殺したアドルフ・ヒトラー、ナショナリズムを肥大化させ大東亜共栄圏という幻想のもと、アジア各国を侵略した日本、レーニン主義の貫徹をスローガンに数百万人の大粛清をおこなったスターリン、極左社会主義思想のもと大躍進運動、文化大革命等の政治運動で数千万人の死者をだした毛沢東、おなじく極左社会主義思想のもと300万人の資本家・知識人を虐殺したポル・ポト、世界中でテロを繰り返すイスラム原理主義者、慢性的な飢餓や人権抑圧

を放置する金正日。彼らはいずれも堅固な理想を抱いた、換言すれば狂信的な理想主義者である。ある意味で民主主義と人権、テロ防止を旗印として独裁政権に攻撃をしかけるアメリカ合衆国大統領も、この範疇に入れることができるだろう。しかし民主主義と人道主義の押しつけさえ批判されるのでは、人間にできることは何もないと言わざるをえない。各国国民・民族・人種・宗教の平和的共存の不可能性。パレートはそこまで見据えて人間社会を悲観的に描き出したのか。この問題は今なお解決されていない。

## 結語

パレートは人類の歴史をエリート間の闘争の歴史と見た。彼のいう集合体の残基が優勢な一般大衆は、結合の残基が優勢なエリートたちによって支配され、搾取され続けてきた。パレートは「ファシズムのマルクス」と呼ばれたが、『一般社会学大綱』を読み終えた今、人類の歴史を階級闘争の歴史ととらえたマルクスより、パレートの歴史観のほうがより包括的な解釈の枠組みを呈示しているように思う。

絶えざる周流によって、新しいエリートが社会の下層階級から台頭し、上層階級へと上昇し、しばしの間繁栄を享受するが、やがて衰退して舞台を去ってゆく。あたかも仏教の「無常」を想起させる歴史観である。パレートはこの「循環、波動、振動」といった現象のメカニズムを形而上学的用語ではなく、少なくとも彼にとっては諸現象から帰納的に導かれた「科学的用語」で語ろうとした。「残基」という概念が科学的概念であるとする主張には強い反発が予想されるが、それを膨大な歴史的事象で論証・傍証しようとしたパレートの姿勢は評価されるべきだろう。

最後に本書におけるパレートの思想を、彼の利害関心と結びつけて相対化してみよう。彼の全著作を検討することなく、このような相対化をすることは危険な企てであることは十分承知

のうえでの試みである。彼の『一般社会学大綱』を読んだ読者の多くは、本書の行間に「熱い思い」を汲み取れず、逆に彼のシニカルな言説に少なからず失望したのではないだろうか。

その原因は第一に彼が自然科学的方法論を堅持し、冷静かつ客観的に現象を分析し、ウェーバー同様、慎重に認識における価値判断の混入を避けたことに求められよう。『一般社会学大綱』の1章～5章で展開される科学哲学・方法論は当時の社会科学者の中では群を抜いている。本書は政治的扇動を目的とするものではない。あくまで歴史-社会現象のなかから法則命題を抽出するために、冷徹な視線で書かれた書物である。

第二に、彼の出自に注目したい。パーソンズによれば、パレートは文明（文芸・芸術・科学など）を愛した。「彼はリベラルであったが、それは有産階級的な意味ではなく、むしろ貴族

的なまた『文化的な』意味においてそうであった。彼は人生の愉悦に通じた粹人であり、思想と行為の自由を愛した。<sup>79</sup>すでに述べたように彼は狡猾な「投機家」や「狐」たちを好意的に見ていない。だが他方で思想や行為の自由を窒息させる「ライオン」と「力」も嫌悪する。かれの淡々とした社会現象の分析と記述は、彼がそこから距離をとって何不自由なく生活できる資産と地位を保有していたからではないか。ゆえにこそ彼は意識せず認識における価値判断の混入をさけることができたのだ。

パレートが『一般社会学大綱』を執筆してから90年以上の歳月が流れた。その間、自然科学は言うに及ばず、社会科学も大いなる発展を遂げた。にもかかわらず彼が本書で提起したさまざまな問題は依然として未解決のまま、われわれの眼前に横たわっている。

## 注

- 46 ここでパレートは近年多くの経済学者が、政治的理論に対して、もっぱら経済的な理論、いわゆる「唯物史観」を対置し、結果的に「社会諸現象の相互依存を無視するという誤謬」に陥っているとして、間接的な形ではあるがマルクスの唯物史観における経済決定論を批判している。
- 47 Pareto, V., 同訳書、§ § 2244-2245, § 2251. 前者の政治体制より後者の政治体制の方が、政権は安定する。だがその場合、力の行使に対する信念は専制君主の側だけでなく、被支配階級にも存在する（圧制に対する抵抗）。この種の政治体制の均衡が破られる理由はここにある。
- 48 Pareto, V., 同訳書、§ § 2247-2250. 「支配階級は均質なものではない。支配階級自体がそのなかにより制限された一つの政府と階級とを、あるいは実質上・實際上優越している一指導者、委員会をもっている」。しかし多くの人は支配階級を一人物または具体的な一単位として表象し、それらに単一の意志を想定し、論理的な手続きでもって計画を実現するものと信じがちである。しかし実際には、個々の支配階級のメンバーとは無関係に機能する「機構」が存在する。現象の主要部分は機構であって個々人の自覚的意志ではない。この機構は我々にウェーバーの「官僚制」を想起させる。
- 49 § § 2255-2256. パレートによればイタリアのデプレアティス（1813-87:首相）とジョリッティ、イギリスの上院議員たち、アメリカ大統領のウィルソンとブライアン、フランスのナポレオン三世たちは、いずれも「投機家たち」の首領となることで、その地位と権力を握った面々である。
- 50 Pareto, V., 同訳書、§ 2257. 金権政治に対する批判は我が国でも議会制民主主義を採用して以来途絶えたことがない。理想主義者はこのパレートの言説に嫌悪感を抱くであろうが、善悪ではなく真偽の基準から判断すれば、正しいのはパレートのほうである。しかし「支配するためには支配者が恩恵を与えること、金融家および経済的生産の企業家を保護すること、そして返礼として、かれらから好意のしるしをうけることが必要である」という命題が一定不変性をもつと主張することは、民主政治における金権体質からの脱却の可能性を否定してしまうことになる。
- 51 支配者と投機家との秘められた「一定不変」の関係として、パレートは「支配するためには支配者が恩恵を与え

ること、金融家および経済的生産の企業家を保護すること、そして返礼として、彼らから好意のしるしをうける」という命題を提示する。この金権政治は現代の民主国家にもあてはまる。パレートは古代ローマ時代までを俯瞰したうえで、この命題を立てた。あらゆる人間社会に蔓延する金権政治を断ち切るすべはないのだろうか。

52 Pareto. V., 同訳書、§ 2262.

53 Pareto. V., 同訳書、§ 2266.

54 ここから「結局、政体がいかなるものであれ、支配する人間たちは平均して、その権力を自己の地位を保つために利用し、特殊的な利益と儲けとを獲得するために権力を濫用する一定の傾向を有し、またしばしばかれらは党派の儲けと利益とをしかるべく区別せず、ほとんどつねに国民の利益と儲けとを混同する」という考察が導かれる。

55 Pareto. V., 同訳書、§ 2268.

56 「換言すれば、権力に到達しない政党は到達するものよりもしばしば誠実であるが同時により狂信的で教派的である」。(Pareto. V., 同訳書、§ 2268)。日本でも1970年前後の学生運動のさなか暴力革命による政変を志す連合赤軍が存在した。また中国でも1989年、共産党の一党独裁を批判し政治の民主化を目指す天安門事件が起こった。彼らはその志において誠実であったと言えるが、結果的には政権党によって壊滅に追い込まれた。もしパレートがレーニンの指導のもと暴力革命によって政権を握ったソビエトで後継者スターリンが行った大粛清や、中国の毛沢東による共産党独裁政権下で生じ反右派闘争や文化大革命を目撃したならば、彼はますます自説の正しさに自信を深めたにちがいない。

57 Pareto. V., 同訳書、§ 2268. 日本の国会議員における派閥の領袖たちが、まさにこの例に当てはまる。政治家の行動に対する明敏な洞察は、パレート自身が若き日に国会議員に出馬した経験に由来するものであろうか。

58 Pareto. V., 同訳書、§ 2268. 国民の教育レベルが上昇し、当時とは比較にならぬほど政治に対する監視が強化された今日でさえ、多くの国々では選挙に多額の金がかかり、政治家は支持者の利益を考慮しなければならない。政治家のさまざまなスキャンダルが紙面を賑わすことも多いが、政治とは資源の分配をめぐる諸集団の抗争であり、代議士はこれら集団の利益代表であることを考えれば、彼の主張はしごく当然のこととみなすこともできる。

59 Pareto. V., 同訳書、§ 2268. 小泉純一郎内閣において、党内を騒がせた田中眞紀子・鈴木宗男・加藤紘一といった与党の大物議員、社民党の辻本清美衆議院議員がいずれも脱税等で議員辞職に追い込まれたのは単なる偶然と思われない。

60 Pareto. V., 同訳書、§ 2277. このことは個人にもあてはまる。すなわち事を成すにあたって詭計と策略を弄し、場合によっては力を行使用することのできる人物は栄達を享受できる。

61 Pareto. V., 同訳書、§ § 2279-2289. マクロな経済的データが1国においてさえ不備であった状況では、長期的な経済変動を説明する法則命題を立てることは不可能であったろう。パレートはさまざまな歴史的事象に言及して、長期的な景気変動を説明しようと試みるが、アド・フォックな印象を払拭できていない。

62 Pareto. V., 同訳書、§ § 2299-2301.

63 パレートの指摘は正しい。暴力（戦争・略奪・襲撃・）詐欺、不正、課税、デフォルト、預金封鎖、インフレなどによって、我々は何度も損害を被ってきた。個人的にも、私の祖父は金融恐慌による銀行の倒産で、銀行設立の出資金を全て失い、祖父の弟は戦争で経営していた食堂、借家20軒を全て失った。母は戦後の預金封鎖とインフレでかなりの額の預金を失い、父のすべての保険は、高度経済成長時代のインフレでほとんど紙くずになった。私はこれといった被害を受けていないが、医療保険の改悪や増税で、政府から搾取されている。今や世界一の赤字国債を抱える日本政府が今後増税とインフレ誘導政策を推し進めるのは確実と思われる。

64 Pareto. V., 同訳書、§ 2316.

65 Pareto. V., 同訳書、§ § 2321-2322. 残念ながら筆者はパレートのような該博な歴史暦知識をもたない。しかしユークリッドによる数学の定式化が、ギリシャ時代に行われたことからして、その可能性は十分考えられる。だが、その後、西欧社会派中世キリスト教の間に包まれ、ルネッサンスとともに合理主義が復活する。我々人類はこのような無知と啓蒙の循環に翻弄されてきたのか。現代社会においてさえ生き続ける非合理的な思想や信仰の

根源は何に由来するのか。

66 Pareto. V., 同訳書、§ 2325.

67 Pareto. V., 同訳書、§ § 2326-2327. 「あらゆる国においてプロレタリアの擁護者自身はプロレタリアではなく、それどころか、非常に裕福な人々であること、ある人たちは社会主義党の代議士や文筆家のように、金持ちあるいは大金持でさえある」。

68 Pareto. V., 同訳書、§ 2329.

69 Pareto. V., 同訳書、§ 2330.

70 この見解はT.パーソンズにも見出せる。彼はフロイトの「循環」に関する論証が、ギリシャ、ローマ、西欧諸国で起った出来事に依拠しており、中国やインドなどは考慮されていない点を指摘する。パーソンズによればこれらの国では社会の長期的な安定が見出され、インドのカルマと輪廻という二大形而上学的教義に対する懐疑的思想運動は、何の意義も持たなかった。(Parsons, T., *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill ed.1937.T.パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅厚東洋輔・溝部明男訳、木鐸社、1976-1989年。第二分冊、243頁)。

71 Pareto. V., 同訳書、§ 2410.

72 Pareto. V., 同訳書、§ 2410. だが彼はこうも述べている。「本書において、われわれはこの方向で〔作用諸力を追加する方向で〕何歩かを踏み出すことができた(二三四三以下)。しかし、この道は障害物で満たされており、望んだほどには進むことができなかった」。おそらくこれが彼の本音であろう。

73 Parsons, T., 前掲訳書、第二分冊、255頁。

74 Parsons, T., *The Social System*, Free Press, 1951. T.パーソンズ著、佐藤勉訳『社会体系論』青木書店、1974年、序文。

75 Pareto. V., 前掲訳書、§ 2413.

76 佐藤茂行『イデオロギーと神話 パレートの社会科学論』木鐸社、1993年、133頁。

77 Pareto. V., 前掲訳書、§ 2507.

78 Pareto. V., 同上。

79 Parsons, T., 前掲訳書、第二分冊、253頁。

## 文 献

Aron, R., *Main Currents in Sociological Thought II*, Basic Books Inc., 1967. レイモン・アロン『社会学的思想の流れII』

北川隆吉・宮島喬・川崎嘉元・帯刀治訳、法政大学出版局、1984年。

Bousquet, G. H., *The Work of Vilfredo Pareto*, Sociological Press, Minneapolis, 1928.

Buckley, W., *Modern Systems Theory*, Prentice-Hall, 1967. W. バックレイ著、新睦人・中野秀一朗訳『一般社会システム論』誠信書房、1980年。

フロイト, S. 『フロイト著作集第1巻：精神分析入門』懸田克躬・高橋義孝訳、人文書院、1971年。

Freund, J., *PARETO, la theorie de l'equilibre*, Seghers, Paris, 1974. J. フロイント『パレート—均衡理論—』小口信吉 板倉達文訳、文化書房博文社、1991年。

Ginsberg, M., "Pareto's General Sociology.," *The Sociological Review*, XXV II 1,3, July 1936, pp.221-245.

Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1937.

L.J.ヘンダーソン『組織行動論の基礎—パレート—の一般社会学—』組織行動研究会訳、東洋書店、1975年。

———, "Pareto's Science of Society," *Saturday Review of Literature* 25, May, 1935, pp3-4,10.

Homans, G. C. and Curtis, Charles P., *An Introduction to Pareto. His Sociology*, Knopf, New York, 1934.

Pareto. V., *Trattato di Sociologia Generale*: G.Barbéra, 1916. *The Mind and Society. A Treatise on General Sociology.*, Translated by Andrew Bongiorno and Arthur Livingston, 1935.

Parsons, T., "Review of Mind and Society by V. Pareto and Pareto's General Sociology by L.J. Henderson," *American Economic Review*, Vol. XXV. 1935, pp.502-508.

———, "Pareto's Central Analytical Scheme," *Journal of Social Philosophy*. Vol. I.3, pp.244-246, 1936.

- . *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill ed. 1937. T. パーソンズ『社会的行為の構造』 稲上毅厚東洋輔・溝部明男訳、木鐸社、1976～1989年。
- . *The Social System*, Free Press, 1951. T. パーソンズ、佐藤勉訳『社会体系論』 青木書店、1974年。
- Powers, C.H., *Vilfredo Pareto*, Sage Publications, 1987.
- Sica, A., *Weber, Irrationality and Social Order*, Berkley : University of California Press, 1988.
- Stark, W., "In Serch of the Ture Pareto," *The British Journal of Sociology*, XIV, 2, June, 1963, pp. 103-13.
- Zaitlin, I.M., *Ideology and the Development of Sociological Theory*, Prentice-Hall, Inc., 1968. I.M. ザイトリン「ヴィルフレド・パレート（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）」山田隆夫訳、『阪南論集人文自然科学編』第18巻2号、3号、1982-1983年。
- 赤坂真人「パレート行為理論再考 — 非論理的行為の概念を手掛かりとして —」『関西学院大学社会学部紀要』第74号、1996年。
- 「パレート行為理論再考（Ⅱ）— 残基と派生 —」『吉備国際大学社会学部研究紀要』第11号、2001年
- 佐藤茂行『イデオロギーと神話 パレートの社会科学論』木鐸社、1993年。
- 中野秀一郎「社会学におけるシステムの思考」『現代社会学12』第6巻2号、講談社、1979年。
- 富永健一『現代の社会学者』講談社学術文庫、1993年。
- 友枝敏雄『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣、1998年。
- 日向寺純雄「パレート社会学とイタリア財政社会学」『青山経済論集』第34巻3号、1-23頁、1982年。
- 松嶋敦茂『経済から社会へ—パレートの生涯と思想—』みすず書房、1985年。